

## 「VIEWnext 創刊記念セミナー」開催

# 子どもたちの「これから」を見据え、 「今」必要な教育を考える

本誌が『VIEW21』から『VIEW next』へと名称を変更し、装いも新たに創刊することを記念して、2021年3月27日(土)、オンラインによる「創刊記念セミナー」を開催。

未来の展望から始まり、新学習指導要領やGIGAスクール構想、「令和の日本型学校教育」など、未来から今へと、バックキャストिंगの視点で構成されたプログラムを通じて、学校教育の「今」と「これから」を、多くの視聴者とともに考えた。

## 全国の教育関係者が集い、 最新の教育情報を共有

(株)ベネッセコーポレーションが発行する教育情報誌『VIEW21』は、1974年、高校向けの大学入試情報誌『進研ニュース』として誕生した。1995年、『VIEW21』に名称を変更し、2015年には小学版・中学版を統合する形で教育委員会版を創刊。最新の教育情報や全国の小・中・高校の取り組みの先進事例を届けてきた。そして、2021年度、名称を『VIEW next』に変更。それを記念して本セミナーを開催した。

セミナー開会にあたり、VIEW21編集部統括責任者の柏木崇が、名称変更の理由を、「予想困難な時代だからこそ、自らの手で未来を描くことが求められる。21世紀のその先も、学校や先生方の今に寄り添い続け、ともに学校教育の未来を描くパートナーとなることを目指していく。その決意を示すために新たな名称にした」と説明。そして、「学校や先生方、教育委員会、保護者、地域など、『社会に開かれた教育課程』実現の担い手と言われるすべての方々にとって、学

### ◎セミナープログラム

#### ・特別講演

将棋棋士 羽生 善治九段  
「予測困難な時代を生きる  
私たち人間に  
求められていること」

#### ・基調講演 國學院大學 教授 田村 学

「コロナ禍の今こそ、『新学習指導要領』の要諦を改めて捉える」

#### ・分科会

##### 小・中学校 領域

東北学院大学 教授・学長特別補佐 稲垣 忠

「ICT×新学習指導要領×個別最適化  
～GIGAスクール構想でどのような学びを実現するか～」

事例校による実践発表とベネッセによる解説

##### 高校領域

「新学習指導要領に基づく  
新教育課程の編成で必要な視点・考え方」

#### ・特別プログラム 若手教師による、「私が考える教育のnext」の発表



校現場の今を捉え、未来を描くよりどころのような存在になることを目指すという点を踏まえて、学校教育の『今』と『未来』をつなぐプログラムを企画した」と述べた。特別講演から特別プログラムまで、未来から今へと、バックキャストिंगの視点で構成されたプログラムへの思いが伝えられ、セミナーはスタートした。

上記のプログラムのうち、今号で

は、國學院大學の田村学教授と、東北学院大学の稲垣忠教授・学長特別補佐の講演内容を紹介する。

Web VIEWn-express もご覧ください

ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト内の「VIEW n-express」コーナーでは、その他の講演の概要や、動画の一部をご覧いただけます。

VIEW n-express 検索

右記の2次元コードからもアクセスできます。▶▶▶

## コロナ禍の今こそ、 「新学習指導要領」の要諦を改めて捉える

國學院大學 教授 田村 学

### 「何を学ぶか」から 「どのように学ぶか」へ

冒頭、田村教授は、小学校では2020年度、中学校では2021年度から全面実施となった新学習指導要領の要諦は、「社会で活用できる資質・能力の育成と、子どもの視点に立った学びの実現にある」と説明。「子どもは、一方的に教え込まれる存在ではなく、有能な学び手であると捉え、『何を学ぶか』から『どのように学ぶか』に光が当てられている」と述べた。

そして、育成を目指す資質・能力が、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の3つの柱に整理され、各教科では、それらを踏まえた目標・学習内容が見直され、学習評価も3観点にまとめられたことを説明。その上で、「目標・内容・評価と、入口から出口までが1本の軸でつながったこと、そして、教科ごとの観点が整ったことが、今回の改訂の大きなポイントの1つ」と、田村教授は強調した。

### アウトプットとインプットの 繰り返しで知識が「駆動する」

次に、授業における「主体的・対話的で深い学び」に焦点をあてて解説。「主体的な学び」は、子どもが自分の意志で自覚的・目的的に学びをコントロールすること、「対話的な学び」は、多様な他者との対話により多くの情報を得たり発信したりして新たな知を創造することと説明した。

その上で、趣旨をつかむのが難しいとされる「深い学び」について、田村教授は、周囲との対話や発表、調べ学習などを重ねることによって発言の質が高まり、学ぶ態度も意欲的になっていく子どもの様子を事例として紹介しながら、「多くの情報のインプットとアウトプットを繰り返す中で、ばらばらだった知識・技能が関連づけられ、構造化・身体化され、納得感や理解、気づきを得られる。そうした『駆動する』状態であることこそが、深い学びだ」と語った。

さらに、知識・技能を関連づける鍵は、「活用・発揮」だと指摘。「アウトプットの間を増やすことが大切であり、アクティブ・ラーニングの視点を取り入れることは、そうした意味でも重要。発表や意見交換、ノートへの記述など、アウトプットとインプットを頻繁に繰り返すことで、脳は活性化し、知識・技能の構造化・身体化が進むと考えられる」と説明した。

### 協働的な学びの重要性に伴い、 学校の役割も変化

そのように、知識・技能を活用し、関連づける場面は、探究型の学習では頻繁に見られるとし、「課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現というプロセスの中で、知識・技能は繰り返し使われる。そこで他者との協働が行われれば、知識・技能は『駆動する』し、学びの質がさらに高まる」と述べた。

その上で、「そうしたプロセスを経て獲得した知識・技能は、記憶と



**たむら・まなぶ** 國學院大學人間開発学部初等教育学科教授。新潟大学教育学部卒業。新潟県の小学校や柏崎市教育委員会、文部科学省初等中等教育局視学官などを経て現職。専門は教科教育学、教育方法学、カリキュラム論。著書に『学習評価』（東洋館出版社）など。

して定着しやすく、新たな課題に応用することもできるようになる」と語り、「総合的な学習の時間」で探究学習を行った子どもほど、平均正答率が高いという文部科学省「全国学力・学習状況調査」の結果を示した。

そして、「『協働的な学び』は、習得と探究の両方において重要だ。そのため、学校の存在価値がさらに高まるとともに、役割も変わっていくのではないかと」の見解を示した。

「GIGAスクール構想が推進されてICT環境を整えば、時間・空間を超えて学びのフィールドが広がり、学びの場の中心となる学校の存在価値がより高まるとともに、『個の学び』と『集団の学び』の往還が加速するはず。その中で、教育課程を専門的にデザインできる教員集団と、子どもの学びに欠かせない大勢の仲間がいる学校は、これまで以上に重要な役割を果たす」と、田村教授は講演を締めくくった。

# ICT×新学習指導要領×個別最適化 ～GIGAスクール構想でどのような学びを実現するか～

東北学院大学 教授・学長特別補佐 稲垣 忠

## 個別最適化と協働を目指す 「令和の日本型学校教育」

稲垣教授が最初に指摘したのは、学校教育におけるICTの位置づけが、ここ数年で変化していることだ。以前は、授業でICTをどのように使うのかが議論の中心だったが、最近では、家庭や地域にもICTを活用した学びが浸透したこともあり、ICTは学校内外の学習を支える基盤として位置づけられるようになった。

「ICT教育を本格的に推し進めようとしているのが、GIGAスクール構想であり、ICTの活用を授業に限定して考えては不十分だろう」と、稲垣教授は強調した。

次に、アメリカや中国における最先端のICT技術を駆使した個別最適な学びや学習評価の事例を紹介。続いて、ここ数年の教育行政の流れと要点を確認した。新学習指導要領については、探究し続ける人を育てることを目的として、資質・能力の育成を重視した教育への転換を図

り、学習の基盤として「言語能力」「情報活用能力」「問題発見・解決能力」を教科横断で育むことが打ち出されたと、ポイントを整理した。

2019年に発表されたGIGAスクール構想については、「オンライン教育」「個別最適な学び」「プロジェクト型学習」をキーワードに挙げた。そして、2021年度は、整備されたICT環境をどのように教育活動に活用していくかが問われていることを確認した。

2021年1月に発表された中央教育審議会「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して（答申）」については、ポイントとなる「個別最適な学び」と「協働的な学び」について整理（図1）。前者は子どもの特性や進度に合わせた教育、後者は探究的な学びと多様な他者とのかかわりが重視されているとし、それらを実現するために、教科等の授業時数の配分の弾力化、小学校高学年の教科担任制の導入、学習データやデジタル教科書の活用など、踏み込んだ施策が打ち出されたことを解説した。



**いなぎ・ただし** 東北学院大学文学部教育学科教授。金沢大学大学院教育学研究科、関西大学大学院情報学研究科修了。日本教育メディア学会理事、日本教育工学会代議員、文部科学省・経済産業省の専門会議の委員を歴任。研究分野は情報教育、教育の情報化、インスタクショナルデザインなど。著書に『探究する学びをデザインする！情報活用型プロジェクト学習ガイドブック』（明治図書出版）など。

## 1人1台端末を活用し、 子どもの個性を生かした学びに

稲垣教授がかかわるICT活用についての学校事例も紹介された。

ある小学校では、タブレット端末を持ち帰れるようにしたところ、家庭学習時間が増えるとともに、子どもが自分の学力に合った難易度の問題に取り組むようになった。そして、自力での学習が難しい子どもは、学校で教員の個別指導を受けるといった、個に応じた支援が適切に行われていることが、タブレット端末に蓄積された学習履歴によって実証されたという。また、自主学習ノートの内容をタブレット端末を使ってクラス全体で共有したところ、よい取り組みが広がる相乗効果も見られた。「子どもの学びを可視化することも、

図1 「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して（答申）」のキーワード

### キーワード

#### ◎個別最適な学び

- 指導の個別化+学習の個性化  
→ICT(教材+スタディログ)

#### ◎協働的な学び

- 探究や体験活動で多様な他者とかかわる
- ICTによる他の学校とかかわりも

#### ◎弾力化

- 年間授業時数と教科の標準時数
- 学年の系統と発達段階

※稲垣教授の講演資料を基に編集部で作成。

個別最適  
×  
協働・探究

データ活用・弾力化

個別最適な学びのあり方の1つではないか」と、稲垣教授は訴えた。

情報活用型プロジェクト学習については、ICTを活用して情報の収集・編集・発信を行う探究学習の実践事例と、その授業をデザインするための「学習活動カード」の活用法が紹介された。そのカードには、①収集＝図書・ウェブ・アンケートなど、②編集＝比較・関連づけ・レポート・新聞など、③発信＝発表・質疑応答・振り返りと、プロセスごとに具体的な活動内容が書かれている。教師の単元設計用に開発したが、子どもが活用する例も報告されている。稲垣教授は、「カードの組み合わせによって、数学的な探究、社会的な探究など、様々な手法が身につく。他者と協働で探究に取り組む際も、自分なりの切り口を持って取り組むことができるので、子どもの個性や教科の学びを生かした探究につながると期待している」と、思いを述べた。

## 教育委員会が目指す方向性を発信することが重要

GIGAスクール構想については、デジタルトランスフォーメーション

(以下、DX)<sup>\*1</sup>の観点から改めて整理した。稲垣教授は、教育のDXには、**図2**に示したように、「日常」「学び」「授業」の3層があり、「どこでも」行えるものと「学校で」行うものがあると説明。具体的には、学校と保護者との連絡や学校生活の効率を高めるために「日常的に使うICT環境が土台にあり、AIドリルなどによる個別支援やオンライン学習など、子どもの「学び」の環境を保障する。その上で、授業では、PBL<sup>\*2</sup>やSTEAM教育<sup>\*3</sup>、遠隔授業といった教育活動に落とし込んでいく。同時に、「日常のDX」で個人情報管理などの情報リテラシーを、「学びのDX」で計画立案や振り返りなどの学習調整力を、「授業のDX」で探究学習のためのICT活用技術などを身につけ、学習の基盤となる情報活用能力を育むことになる、と解説した。

最後に、学習の基盤となる情報活用能力に関する自治体の取り組みを紹介。宮城県仙台市では、情報活用能力を「活動スキル」「探究スキル」「プログラミング」「情報モラル」の4つに分類し、それぞれについて具体的な学習内容と該当単元を、小・中学校別に提示しているという。また、東京都港区では、教育における

ICTの位置づけが学習のツールから学習環境に変わりつつある状況を踏まえ、学校・家庭での学びや、学校と家庭との連絡の取り方の変化について、具体例を挙げて説明したリーフレットを作成し、情報発信をしていると紹介。「自治体として何を目標しているのか、教育委員会が的確にメッセージを発信することが重要だ」と、稲垣教授は強調した。

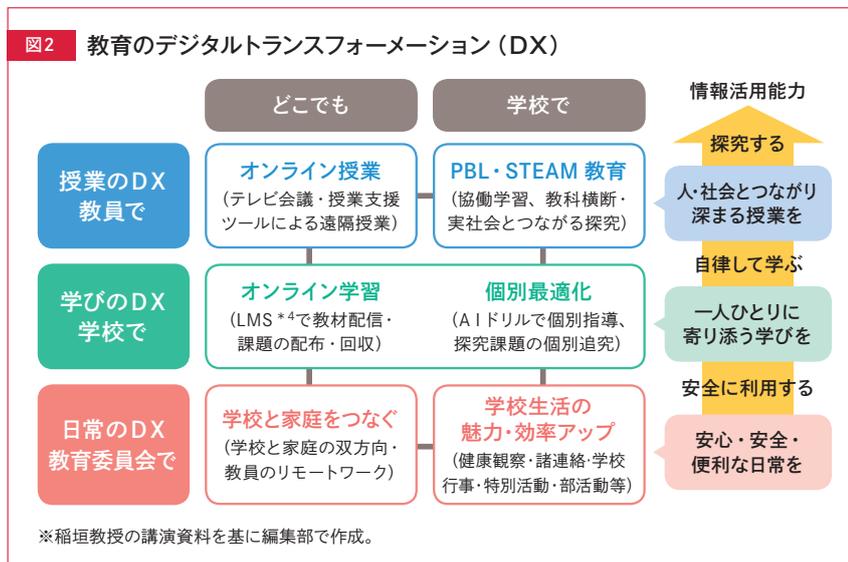
## 子どもが「もやもやした感情に出会う」きっかけづくりを

講演後は、視聴者から寄せられた質問に稲垣教授が答えた。

「学習の基盤となる言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力の関係をどう捉えればよいか？」という質問には、「必ずしもその3つにとらわれずに、教育委員会や学校が独自に考えてみてはどうか」と述べ、「21世紀型スキル」に言語能力や情報活用能力を位置づけた茨城県つくば市の例を紹介した。そして、文部科学省が示した定義には、情報活用能力にプレゼンテーション能力も含まれているとし、「それら3つは、独立した力ではなく、重なり合う力と捉えるとよい」との見解を示した。

次に、「問題発見能力の育成で大切なことは何か？」という質問には、「良質な問題に出会うこと」と回答。問題を見いだすためには、問題の定義づけが必要であり、「納得がいかない」「このままではいけない」「面白そう」といった違和感や問題意識、好奇心など、「子どもの気持ちを動かすことが大切だ」と指摘した。「もやもやした感情が、なぜ生じるのかを明確にすることが、問題の定義づけにつながる。そうした感情に出会うきっかけをつくるのが、教員の大切な役割ではないか」と語った。

図2 教育のデジタルトランスフォーメーション (DX)



\*1 デジタル技術やデータを駆使することで、社会や生活の質を変革していく取り組み。 \*2 Problem Based Learning、あるいは Project Based Learning の略で、問題解決型学習のこと。 \*3 Science, Technology, Engineering, Art, Mathematics の頭文字で、科学・技術・工学・芸術・数学に重点を置いた教育、人材育成のこと。 \*4 Learning Management System の略。インターネットを通じて、eラーニングを配信するプラットフォームのこと。